

# カタルシス政治史觀の諸相

——ヘーロドトスIIアリストテレース史觀通覽——

池 田 栄

## 目 次

### I. 緒 論

### II. 本 論

- 1 アリストテレース的カタルシス
  - 2 ヘーロドトスの金言
  - 3 「サギはけわしい所を求める。」(ラテン語彙)
  - 4 「青少年はやっぱり青少年だ。」(英語彙)
  - 5 「青年よ、神の栄光において大志を抱け、……。——クラーク博士
  - 6 ソポクレース作、オイディプス王。
  - 7 シェイクスピア作、マクベス。
  - 8 ヲウ慢に関する、仏教とキリスト教の教訓
- Contents of the Article, "Several Views of Catharism in Political History *alias* A Survey of Herodoto-Aristotelian Interpretations of History."
- I. Introductory Discourse (Résumé in *English*)
    1. Aristotelian Catharism

2. Herodotus' Aphorism
3. "A heron seeks steep places." (Latin Proverb)
4. "Boys will be boys."
5. "Boys, be ambitious in the glory of God...!"—Dr. William S. Clarke
6. Sophocles, The Oedipus Tyrannus.
7. Shakespeare, Macbeth.
8. Buddhist and Christian Precepts about Arrogance

## Ⅰ 緒 論

およそ物の見方に2があり、その1は「道德的なる」(moral) ハトモルは「社会的なる」(social, sociable) ハトモルを尊重し、<sup>1)</sup>「不道德的なる」(immoral; immoralisch) ハトモルは「反社会的なる」(antisocial) ハトモルを排除する見方であり、その2は「非道德的なる」(unmoral, nonmoral, amoral; amoralisch) ハトモルは「非社会的なる」(unsocial, nonsocial, asocial)——唯物弁証法では「社会主義的なる」(socialistic)——ハトモルを主張することである。その1は排中律の形式論理学を前提とし、その2は弁証法を前提とし、そのうち neither nor の弁証法によるものは「不道德的なる」こと・「反社会的なる」ことを含み、as well as の弁証法によるものは動(弁証法的發展)的にこの反を含んでいる。うへの2種の見方のうち「非道德的なる」主張・「非社会的」なる主張はつねにゴウ慢(尊大)であるが、人間成長の過程において、「道德的なる」もの・「社会的なる」ものの尊重も、反抗期直後の成人に見るゴウ慢——hostile rivalry と結合する——に始まり、心理的カタルシスを経て、friendly rivalry と結合する謙讓に發展する。

注の a のギリシヤ文の例。 *gámos ágamos* = Marriage that is no marriage, a fatal marriage. *khōris hūgias áhos bhos, bhos áhōtos*.  
= Without health life is no life, [but] a lifeless life; 健康なくしては生命は非生命であり、生命は生命がない。

なす immoral と unmoral, ……との使ひ別けに関しては市河三喜文博士「ミチノ、ギリシヤ語初歩」(6版) 118頁以下参照。

うえの心理的カタルシスを政治史に認める、アリストテレスの思想に基づき、このカタルシス史観を科学的に樹立しようとする努力をわたくしは自著「テオリアの真義と政治学」において試みている。ここにおいては、広くこのカタルシス政治史観の思想の諸相を、アリストテレスの見解以前にも及んで論述しようとする。

しからば、うえのごときカタルシス政治史観の強調は何故に行われるか。そもそも戦後の日本における精神的虚脱に乗じて大いに盛んとなったのは either or の弁証法たる個人主義実存主義と as well as の弁証法たるマルクス主義と種種の機械論的社会観であり、いずれも *hostile rivalry* の観念および実行と結合している。しからばどうしてこんな状態であるかというに、まず、うえのごとき思想の持ち主が、その不十分な自覚から、史実または現実に接してうえの史観を有するに至らないのみならず、うえのごとき経過を経て *friendly rivalry* を認めるに至ったものも、(1) この経過を十分に自覚せずして、対症療法たる精神指導法を主張し、同類療法たるカタルシス心理の強調を忘れ、また(2)現代にふさわしい科学的哲学を樹立するに至っていない。これ、今日の日本における *hostile rivalry* 流行のゆえんであり、わたくしがうえのごときカタルシス史観を強調するのもまたこのために他ならない。なおわが国政界の保守派におけるうえのごとき「哲学の貧困」(*das Elend der Philosophie*)と精神指導法とがあい合して、太ったブタよりやせたソクラテースを選ぼうとするインテリの傾向(“Better be a thin Socrates than a fat swine.”)に拍車をかけ、戦後20数年のきょう、保守派の繁栄におけるシリ貧現象を呈せしめていることを思えば、うえのごときカタルシス史観の強調の必要はいっそう感ぜられる。

注) それは主として戦後日本の禪ブームのことを意味するが、それは米国の禪ブームに便乗している。米国ではハーバード大学の1教授が1種の個人主義的黙照禪——看話(カンナ) 禪に対する——を行ない、それに薬物心理学(pharmacopsychology)を応用し、LSD——その服用により一時的に主として幻視、時に幻聴を伴なう精神分裂類似の状態を招く薬品——を使用し、禪ブームを招いた。しかしLSD使用の故をもって同教授がハーバードから追放されたのちの今日では、この派の禪も表向きはLSDの使用を行わず黙照禪のみを行っているが、ニューヨークで相当広まっているようである。

しかるに一方、わが国理論物理学の有力なグループが従来、素粒子論においてこれが点であることを主張して、広がりであることを否定していたが、その理論上の矛盾から「素領域」の新理論へ転向するに至ったのはここにすこぶる注目すべきことである。

これより先、すでにニュートン(Newton)は光を粒子として、ホイヘンス(Huygens)は波動として説明したが、アインシュタイン(Einstein)を経てブローイ(Broglie)に至り、光のみならずすべての勢力は粒子性と波動性の両面を持ち、従来のうえの粒子説も波動説も楯の半面を見るに過ぎないことが主張せられ、さらにボーア(Bohr)に至ってうえの両性は矛盾の関係でなく、補足の関係であることが強調せられ、それに基づいて自然弁証法の名で弁証法を自然界におしつけたのは非科学的であると主張された。それとともにボーアの補足性原理に先立ってハイゼンベルク(Heisenberg)の不確定性原理によって機械論的因果が否定された。

しかるにこれら一連の研究は究極的粒子の持つ広がり前提とするものであり、たとえばハイゼンベルクの認める思考実験(das Gedankenexperiment)に見られる反跳(der Prall; recoil)はこの広がり前提に思考しうる。かくてこれらの研究グループとその信奉者は、生物学的ないし心理学的記述と物理学的方法との補足性を認めるボーアとこの点の信奉者を除いて、少なくともその結果として原則としてキリスト教のごとき有神論一元論に理論物理学的根

拠を与えた。

ところでこれに反しわが国では素粒子の広がりや否定する理論物理学が出現して、あれかこれかの弁証法——実存主義——に科学理論的根拠を与え、戦前戦中は全体主義実存主義に戦後は個人主義実存主義に活力を供給するところがなくなかった。しかるにこの一派のうちから最も有力なグループが上述のごとき新理論を提唱し、ハイゼンベルク博士を日本に迎えた。このことは研究者としてのわたくしを無性に喜ばした。それはすでに戦前戦中に京大・同大・関大の講壇に京大の法学論叢などに不確定性原理(*das Unbestimmtheitsprinzip*)や物質波動論(*Hypothese de l'onde materielle*)を科学的根拠として有神論的・二元論の史観を主張し、法学論叢では「理論物理学の進歩と古典的史論の復活」と副題する、立憲政治主張の論文などを公表し、純真なる学徒たちの熱心な聴講などを楽しんだが、戦時において理論物理学を背景とする実存主義・戦前哲学のグループの絶対権力と結合した排撃に悩み抜いた苦難などを想起するからであろう。

注) 法学論叢、第37巻第3号(昭和12年9月)所載、なお法学論叢では第40巻第5号(昭和14年5月)、自作、天佑と我憲政の成立、37頁において不確定性原理・物質波動論と史観の關係に論及した。しかるに前者の昭和12年9月号の論文と法学論叢、51巻第4号(昭和19年10月)所載の自作、聖徳太子と国民會議との2論文は関大法学論集、第2巻第2・3号における、わたくしの著作目録に、まことに残念ながら、漏れている。

しかしうえの素領域理論の提唱だけによってわが国における実存主義弁証法が急に大いに反省するとは思えず、従ってわたくしがこの論文を書くうえの理由についても、うえの素領域論の提唱だけによってこれを書き改める程度の事情変更を来たすものではないと考える。現にハイゼンベルク教授のつぎのごときギリシャ哲学の理解にもかかわらず、湯川教授はその理論物理学上の新説提唱に当たってもその哲学的理解はいぜんとして変っていないようである。

まず、うえのごとく日本に迎えられたヴェルナー・ハイゼンベルク教授 (Prof. Werner Heisenberg) が、1967年5月4日、京都大学第1教室において英語をもって「ギリシヤ哲学と現代物理学」(Greek Philosophy and Modern Physics) と称する講演を行ない、荒木不二洋京大教授が訳文を担当した。午後3時から約2時間、超満員の聴衆であったが、家高氏はじめ京大法学部旧同僚のご好意によりわれらは現在教え子の関大大学院の学生たちとよい座席を与えられて、全聴衆とともに最後まで熱心に聴講することができた。ハイゼンベルク教授の論述された要旨はつぎのごとくである。

最近の素粒子物理学では、高エネルギーの素粒子を衝突させると多数の破片に壊れるが、その破片はもとの粒子と同じ大きさで決してより小さい新しい粒子 (new smaller particles) が現われないことがわかっている。この現象は粒子の細分割というより、相対性理論に基づいたエネルギーによる粒子の生成といった方がよい。すべての粒子は、エネルギーという基本的なものからできている。すでは古代ギリシヤではデーモクリトスもプラトーンもともに究極的なものを形あるものと見たが、デーモクリトスがこの形あるものを実体と見て唯物機械論を展開したに対し、プラトーンはこの形あるものを幾何の正多面体 (regular polyhedra, r. polyhedrons) と見て、火は四面体 (tetrahedrons)、地は六面体 (hexahedrons)、空気は八面体 (octahedrons)、水は二十面体 (icosahedrons) であり、従ってその無限分割は不可能であり、それは不滅ではなく、その表面の三角形を組変えることで、他の元素に変わるとする。かくて形あるものは知的には数学的にだけとらえて正確に言葉に表現しうるも、これでは十分な表現でないとして、数学のことばの限界を述べたあと詩人のことばに移り、違ったイメージを人心に与えようとしている。唯一物により広い面から近づくには、心象・陰喩・直喩といったようなことばを使うべきかも知れない。社会

の調和 (harmony of society) が唯一物の共通の解釈に立脚しているならば、科学者のことはよりも詩人のことがより重要かも知れない。

注り なおギリシヤ哲学の4元素については、自著、正統政治学(増補版)、134頁参照。プラトーンの認める4元素の形状については、その著、*タイムイオス* (Timaios) 参照。なおアリストテレスはこの4元素のはかに *airéin* を認めた。その著、*天体論* (p. ouranou), I, 3.

かくてこの講演においてハイゼンベルク教授はプラトーン哲学の対象論をたたえ、ただその方法が近代物理学のごとき実験——思考実験 (Gedankenexperiment, experiment in thought) を含む——による科学的方法を用いず、日常の経験によつたのは注意すべきであるとした。

以上のごときハイゼンベルク教授の哲学説に対し、湯川教授はその素領域理論への転向の今日もなお莊子が「天地」は「万物」の「逆旅」であると言ふことに賛同している。この「万物」という表現はアイデアの複数形アイデアを連想せしめるが、莊子においては「天均」とは「万物」の一体で無差別平等なることを言ひ、「道枢」とは物事の対立を越えた境地を称し、従つて莊子の説は、何人も認めるごとく、汎神論的実存主義である。

Resumé.—As for the views of catharsis in political history, id est, Herodoto-Aristotelian interpretations of history, it would be an arduous task to make them prevail in Japan this age on account of the popularity of the arrogance of the dialectic of as-well-as and of either-or, which fact is due either to the lack of sufficient reflective self-consciousness or to what the psychoanalysts call the *psychagogie* (*die Psychagogie*) or the unrelenting logic of the rational mind, in spite of the newly asserted hypothesis of elementary domains in theoretical physics.

II 本 論

1 Arrogance will be struck humble by a tragedy it figures in.

—deduced from Aristotle's principle of catharsis

2 philei gar ho theos ta hyperékhonta pánta kolouein.

—Herodotus (Hérodotos)

まずアリストテレスの心理的カタルシスの觀念からそのカタルシス政治史觀を推定すれば、これを英語でうえのうたを金言に要約しようとする、ヘーロドトスも同じ史觀を有して示している。しかしこれらの史觀については、すでに論述したから、これを略する。

注り 自著「テオローフの真義と政治等」1—4頁、11頁—。

3 ardua petit ardea.

うたの ardua とは arduum の複数対格であり、うえの句の妙味は arduum とうた語に an arduous (= hard) task, a steep place, a lofty place の語義があることと、うたに用いられる arduum の変化形たる ardua が、その発音上、あとの ardea と語が合うことであり、従ってうえの句の完全な翻訳はどの国語でも無理であろうが、うえの句を “A heron seeks steep places,” と英訳するか、または「サギはけわしい所を求めると和訳する方が、“ardua” を “lofty places” とか「高い所」と訳するより、そのラテン語の西ヨーロッパ的原義から見て、うたをうたと思われよう。このうたは後に述べるうたによつて明らかとなるであろう。



しかるにうえの名句はわが国においては「サギは高い所を求め、」と訳され易く、そのうえサギがサンスクリットで *baka* と称せられ、この *baka* という語に欲げけのため他を欺いて失敗する馬鹿者という意味があり、日本語「馬鹿」の語源がサンスクリットの「*baka*」にあるとの説があることなどからうえのラテン語名句を「馬鹿と煙は高い所に上る、」の意味に解する傾向が大であると考える。しかしこうした解釈はこのラテン語の西ヨーロッパ的意義を去ることが遠い。

注り 自著、*積尊の仏教と近代デモクラシー*、(I) 35頁、36頁。

しからばうえのラテン語名句の、この意味の原義は何であらうか。そもそもサギは、西ヨーロッパで英国人その他ヒューマニズムの強い人の間で、忍耐 (*patience*)<sup>1)</sup> 強い動物として愛ガンされ、また英国の教養人が “*per aspera* (*ardua*) *ad astra*,” と言ふ句や “*bonus vir semper tiro*,” と言ふ金言を好んで用いることから考えて、少なくとも英国の教養人にとって “*ardua petit ardea*,” は困難を経て実現される *humanism* の理想が英国人的な忍耐——英語の *patience*——を経つてあることを意味すると考える。この忍耐こそは見解の対立に際し、自他の個性をともし尊重するところから、*sense of humour* によつて和解に導くものであり、このことはホラス・ウォールポウル (*Horace Walpole*) が「人生は考える人には喜劇であり、感情の人には悲劇である」と言つたことを連想せしめる。従つてまた “*ardua petit ardea*,” の名句は “*per ardua ad astra*,” と “*bonus vir semper tiro*,” の二金言の意味するものをも包含してゐるのは無論のことである。

注り① 英語の *patience* を (G) *Geduld*, (F) *patience* と比較しての意味については、自著、*テオリアの真義と政治学*、44頁注②、自著、*積尊の仏教と近代デモクラシー*、(I) 30頁、注り参照。

- ② 自著、釈尊の仏教と近代デモクラシー、(I) 30頁。
- ③ Through difficulties to stars, 困難を経て星(栄誉)へ。セネカ(Seneca)著、狂ったヘルクレス(Hercules Furens) 437参照。
- ④ A good man, always a recruit, よく男はつねに新兵。Goethe, Maximen und Reflexionen.
- ⑤ 前掲り参照。
- ⑥ 自著、テオリアの真義と政治学、44頁注②。
- ⑦ 前掲書、44頁。

かくてラエの“ardua petit ardea,”はカタルシス政治史観をその裏面から間接に表現するものであると考へる。それとともにこのラテン語名句をうえの「馬鹿と煙は高い所に上る」の意味に解するのはこのラテン語の西ヨーロッパ的原義を去ることが遠いと思う。何となればこの日本語格言がうえのカタルシス史観を表面から示そうとするものであれば、このラテン語名句はわが格言の「実のるほど頭の下がるイナ穂かな」と同じく、この史観を裏面から示すものであるから。

#### 4 “Boys will be boys.”

#### 5 “Boys, be ambitious in the glory of God for the attainment of all that a man ought to be!”

—Dr. William S. Clarke.

うえの2つは合わせて解説するを便利とする。

まず最初の“Boys will be boys,”について言えば、これを最狭義に解し、すなわち“boys”を“girls”に対し用い、思春期(puberty)までの男の子を意味せしめ、そんな男の子のヤンチャは仕方がないの意味にうえの諺を用いる場合が多い。しかしこの場合でもこの句の拡張解釈を行って同様な年齢の女の子のヤンチャをも含ませしめること

が多い。それとともにもまた“boys”を“youths”（青少年）と解して用いるときがある。この場合は「青少年はやっぱり青少年だ」と訳して「青少年」のユウ慢と脱線の恋愛をほのかに戒めるものと解せられる。しからばそれはフランスの諺たる《Il faut que jeunesse se passe》に当たる。なほ、ドイツの諺には、Jugend hat keine Tugend、と言いつのがあつたが、この場合の、Tugend“徳”、Kuschheit“貞節”の義であり、広く、sittliche Vortrefflichkeit“（美德）を意味せず、従つてこの諺は孔子の言われた「少之時、血氣未定、戒之在色」に当たる。この問題となるのは、最後の「青少年はやっぱり青少年だ」と訳されることの“Boys will be boys,”である。

併ひの youth, la jeunesse, die Jugend, juvena となれば「青少年」と訳してあつたが、人生40歳までの時期を言ふ（本文の英・仏・独はこの意味）、狭義にこの語を用ふる youth とは puberty（青春期）を言ふ childhood と manhood との中間で、通常には13—23歳を言ふ従つて teenagers (13-19)（巨著、マオーリンの真義と政治学（増補版）、111頁参照）の時期を含み、英米法ではこの puberty は adolescence と称せられ、男子14歳、女子12歳から21歳までを言ふ、英米法用語としての puberty は婚姻適齢期で男子14歳、女子12歳を言ふ、juvena とは20歳から40歳までを言ふ、キヤロ（Cicero）も juvenis はこの年齢の男女を指す。従つて courts, juvenile delinquency, juvenile books (= books for children) の称の如きは juvena の広義に従ふのである。本文の jeunesse と同じ意味の他の文例、《Si jeunesse savait, si vieillesse pouvait》= If youth but knew, if age but could, 若者に経験なく、老人に力なく。このマタン（Martin）の「力」とぞ、むろん、体力であり、《Savoir, c'est pouvoir》の pouvoir はなご。

右の広義の youth のうち20歳から25歳までは the prime (bloom) of youth と称し、そのたゞ“After thirty youth is slipping away,” と言ふ慣用句がある。

この middle age, l'age moyen, mittleres Alter を「中年」と訳してあつたが、40歳から60歳までを言ふ、英国では第19世紀末（—1592）頃までは prime (中年盛の) と言ふ、その後の the prime of youth を指したが、その後は middle age を指す、この時期は今日また prime of life (manhood) と称せられる。

終つて old] age, la vieillesse, das Greisenalter を「老年」と訳してあつたが、英国では通常には60歳からとせられるが、The Old Age Pensions Act, 1908 では70歳からとせられて、また Through an octogenarian, he is still hale and hearty, や a man in green old age などこの慣用句がある。

つぎに、クラーク博士の金言に及ぶ。札幌農学校（北海道大学の前身）初代の校長として北大の基礎を築いた米国人クラーク博士が任滿ちて、明治10年、帰国するに際し、見送りの学生たちに対し、馬上から叫んだ別れのことばは実に不朽の名言であり、

Boys, be ambitious in the glory of God … (前掲)

青年よ、神の栄光において大志を抱け、人としてあるべきすべてを達成するために、  
 と言うのであった。

そこに“Boys”とあるのは、博士の演説では、直接には農学校学生たる“youths”——しかも狭義の“youth”の時期、すなわち通常いう“puberty”に当たる若者たち——を指していて、その点から言っても「青年よ」と訳すべきである。しかし博士の演説には、内容的に言って、「青少年はやっぱり青少年だ」と訳される英国の諺も含まれており、従ってそこにはヘーロドタスの「神はあらゆる尊大なものを制することを好む」と言う意味が含まれている。わたくしはかく理解する。しかるに博士の名言は、日本において極めて有名であるにかかわらず、単に「青年よ、大志を抱け」とのみ訳出されて一般に知られ、そこには宗教的深さがまったく失われている。それはちょうどリンカンのデモクラシーの定義が単に「人民の、人民による、人民のための政治」と訳されてこの訳のみによって広くわが国に知られ、この定義に“under God”と言う重要な制約が付いているのが忘れられているに通じる。

注りの本論文、前頁参照。

つぎに英語の“ambition”には悪い意味の野望と、よい意味の大志の2義があり、いずれにしても生きがいを感じての目的を有することであり、従ってそれは英仏語の「志気」(E) morale, (F) le moral) に当たり、この「志

氣]によつて競争 (rivalry) が行なわれるが、悪う意味の「志氣」は hostile rivalry のみを、よい意味の「志氣」——すなわち「士氣」——は hostile rivalry または friendly rivalry を伴なう。しかつてよえの hostile rivalry はその hostile rival の消滅を目的とするがゆえに、大願成就としての敵対競争者の消滅はたとえそれが一時的にせよ、勝ち残つた競争者をしてその志氣を消滅せしめ、生きがいを感ぜしめなくなる場合がある。これに反して friendly rivalry は敵対者を認めながら己の志氣消滅がなつ。

註の ambitio [L] (ambi (about) + itio (going)) の語源的直訳は「歩みまわること」であり、その慣用的意味は役職を求めぬものか candidatus (白衣 (white toga) を着ていたもの) の義とこつ合法的に努力するものか、[L] ambitus が贈賄など非合法的方法で役職を求めぬものかを区別され、この意味からなると「派手好き」(disire for pomp) 「名譽心」(desire for fame) や「党派心」(factiousness) を意味した。この英語の「悪う意味の “ambition” をシタニアス (August Wilhelm von Schlegel) はそのシホインズに劇本 “Julius Caesar” に於て “Herrschaft” “支配” “マントヒマンをしてカエサンの板前の演説に於てこの言をいふ。

Ihr alle saht, wie am Lupercus-Fest  
Ich dreimal ihm die Königskrone bot,

Die dreimal er geweigert. War das Herrschaftsucht?

Doch Brutus sagt, dass er voll Herrschaftsucht war,

Und ist gewiss ein ehrenwerter Mann. (3. Aufzug, 2. Auftritt.)

統計によれば、京大入学者の自殺は漸次増加して、昭和41年度には11名あり、42年の京大入學式には奥田総長がそれに言及したと言われる。これをあつて単に精神的過勞によるノイローゼに帰するのは當らなうと考へる。その大部分はたとえよ意味にせよ、hostile rivalry があつたためであらう。

ところでむしろリンクラーク博士の言の場合の “ambitious” は善う意味であるが、もしそこに清教徒的教訓の意義が含まれてゐるとするに “in the glory of God” (神のみ栄への極にまつて) の “glory” は “grace” とまつたく

区別され、そのシェン敵さによって「青少年はやっぱり青少年だ」と言うほのかな戒めは認められない。この場合の ambition には hostile rivalry が伴なう。

注り この場合の “glory” は “to give glory to God” の “glory” (= praise, adoration) と異なるが、この場合の “glory” は “glory” を含めて解するか、全然これと別に解するかについて説が別れる。

しかしクラーク博士の場合は、北大の前身たる日本の国立学校の創立当時の校長としての教育方針に従いキリスト教の宗派を超越していったものと考えられるから、博士の “glory” が grace を含んでいることは、ちょうど、古代エジプトの名君、アフ・エン・アトン（アテン）王の「アフ」がうその “glory” と “grace” に当たるものを含んでいたに通ずると考える。この場合の ambition には friendly rivalry が伴なう。

注り 古代エジプト語（自著、正統政治学、77頁参照）。

右のクラーク博士のサッポロ在任は僅か一ヵ年であった。しかし博士の人格とその残した名言の後世への影響は甚大であり、博士が教え子と別れを惜しんだ場所——サッポロから約25キロ離れたところ——には高さ3.5メートルの記念碑がその後に建てられて今日なお旅行者の注意を引いている。そのみならず、博士の離任後2ヵ月にして札幌農学校に太田（新渡戸）稲造<sup>1)</sup>（16）、内村鑑三<sup>2)</sup>（17）などが入学した。

いにしへの先立つ人のあとみれば

踏みにし道は紅に染む——新渡戸稲造

注り (1862—1933)、法学博士、農学博士。1872年に札幌農学校に入り、84年、渡米して以来、在外研究しドイツを経て91年帰国した。しかるに99年（明治32年）には京都帝国大学法科大学が開設せられ、博士は1903年（明治36年）から1906年（明治39年）9月28日まで京都帝大教授として

同法科大学勤務を命ぜられ、その後、一高校長として8カ年在職、13年、東京帝国大学教授。かくて教育者として博士はキリスト教的平和主義者として一貫し、多大の感化を与えた。一方において、20年、国際連盟事務局長となった。また英文著書、*Bushido*、1889は各国語に翻訳され、日本の伝統的武士道を諸外国に理解せしめた。

② (1861—1930)、札幌農学校卒業後、1884—88年、在米、91年、一高講師在任中に教育勅語に対する礼拝を拒否して解職された。その後、「聖書之研究」を出版して、無教会派のキリスト教指導者として、南原繁、矢内原忠雄、塚本虎一の諸氏に多大の感化を与えた。著書に全集20巻、聖書注解全集17巻などがある。

6 ソポクレーレス作、オイディプス王。

7 シェイクスピア作、マクベス。

ソポクレーレスのうへの悲劇においては、ゴウ慢な性格がいかなる運命をも破ろうとして破滅に陥り、シェイクスピア(Shakespeare)のマクベス(Macbeth)の場合は同じ性格が、大野心という形で自己に都合がよいと信ぜられる運命をあくまで利用しようとしてカタストロフィーに陥る。ともにそこには崇高美たる悲壮美がある。これについては自著、テオリアの真義と政治学(14頁)にすでに論述したから、ここにこれ以上に及ばない。

8 ゴウ慢に関する、仏教とキリスト教の教訓

Disgrace goes before destruction, and pride before misfortune,

—— (Proverbs 16: 18)

Vayadhammā saṃkharā. — Sakyamuni

獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣

(中略)

カタルシス政治史観の諸相

弥陀仏本願念仏 邪見憍慢悪衆生

信樂受持甚以難 難中至難無過斯——(正信偈)

仏教およびキリスト教の聖典に見る以上の名句については、その論述を別の機会に譲る。

付記。植田教授「還暦記念の本誌論文集に載せられた自作、「釈尊の仏教と近代デモクラシー」の正誤表を左に示し、読者のお許しを乞う。

頁	正	誤
234	samsāra	samsāra
244	saṃkhārā	saṃkharā
245, 注 ②	235頁	257頁
245	Bodhisattva	Bodhisattva
247, 250	avinivartaniya	avivartaniya
248	証 左	証 査
249, 注 ① 注 ②	単性論 と言い、	單位論 と言い。
250	Magadha	Maghada
251	égalité	égalité